

Henri Bergson Introduction à la métaphysique

ベルクソン『形而上学入門』

Table des matières

●ベルクソンの経歴（年譜）	1
●遺言書（小林秀雄訳、『感想』より、漢字は新字体に、旧かなづかいは新かなづかいに修正）	3
●著作（原題と主な邦訳）	3
●日本語で読める参考文献	5
●仏語による参考文献（仏語版 Wikipedia の Voir aussi の Bibliography より）	7
■「形而上学入門」の位置	9
■ベルクソン「形而上学入門」	10
□分析と直観（Analyse et Intuition）	10
□持続と意識（Durée et Conscience）	12
□構成的部分と部分的表現（Des parties composantes et des expressions partielles）	14
□経験論と合理論（Empirisme et Rationalisme）	14
□実在する持続（Durée de Réelle）	16
□実在と動き（Réelle et Mouvant）	20
□いわゆる認識の相対性（Relativité de soi-disant reconnaissance）	21
□近世の形而上学と科学（Métaphysique et science aux modernes）	22

●ベルクソンの経歴（年譜）

Henri-Louis Bergson : アンリ・ルイ・ベルクソン (1859年10月18日-1941年1月4日)、パリ出身。父親はユダヤ系ポーランド人で音楽家のミッシェル・ベルクソン。母親はイギリス人女性で二人の間には四男三女が生まれた、アンリはその次男。

1863年 (4歳) : ベルクソン一家はジュネーブに移住

1866年 (7歳) : 一家はパリに戻る

1868年 (9歳) : リセ (高等中学校)・コンドルセへ入学、給費制としてイスラエル学院に寄宿し、エコール・ノルマル・シュペリウル (高等師範学校) 入学までの10年間を過ごす、この間ベルクソンは、ラテン語、ギリシャ語演習、フランス語文法、歴史と地理、英語、哲学、朗読で一等賞、一般コンクールでレトリック名誉賞、数学クラス一等賞などを獲得

1878年 (19歳) : エコール・ノルマル・シュペリウルに三位の成績で入学、首位はジャン・ジョレス、この頃ベルクソンはハーバート・スペンサーの『第一原理』(1867年)を熱心に研究、また、カント主義者が揃っていた教授陣に反発、「反カント主義者」と呼ばれ、唯物論者ともみられていた、一級下にエミール・デュルケームがいて、早くも衆望を集めていたが、後年デュルケームはベルクソンを標的とした「復活しつつある神秘主義」批判を展開する

1881年 (22歳) : エコール・ノルマル・シュペリウル卒業、二位の成績でアグレガシオン (教授資格国家試験) に合格、リセ・アンジェの教授に就任、哲学を教授

1882年 (23歳) : リセ・アンジェの教授を離職、女子高等学校教授就任、文学を教授

1883年 (24歳) : 女子高等学校教授を離職、クレルモン・フェランのリセ・ブレーズ・パスカル教授に就任

1884年 (25歳) クレルモン・フェラン大学の講師を兼任、「笑い、人は何を笑うのか? なぜ人は笑うのか?」の講演が評判を呼ぶ

1886年 (27歳) : 教育功労章を授与、論文「催眠状態における無意識的な真似について」を“哲学評論”に発表

1888年 (29歳) : 『**意識に直接与えられているものについての試論(英日翻訳では「時間と自由」)**』及び『**アリストテレスの場所論**』をアルカン書店より上梓、この二論文をソルボンヌ大学に提出して博士号を申請、クレルモン・フェランのリセ・ブレーズ・パスカルを離職、リセ・ルイ・ル・グラン教授就任

1889年 (30歳) : ソルボンヌ大学より文学博士号を授与される

1890年 (31歳) : リセ・ルイ・ル・グラン教授を離職、リセ・アンリ四世の教授就任

1891年 (32歳) : ルイーズ・ニュービュルジェ嬢と結婚

1894年 (35歳) : ボルドー大学講師就任の要請を受けたが辞退、ソルボンヌ教授に立候補するが不採用

1896年 (37歳) : 『**物質と記憶**』をアルカン書店より出版

1897年 (38歳) : コレージュ・ド・フランスの講師に就任

1898年 (39歳) : 再びソルボンヌ教授に立候補するが不採用、父ミッシェルがロンドンにて死去、エコール・ノルマル・シュペリウルの講師に就任

- 1899年(40歳):『**笑い**』を『パリ評論』に発表
- 1900年(41歳): コレージュ・ド・フランスの教授に就任、レヴェーク教授の後任としてギリシア・ローマ哲学の講座を担当する
- 1901年(42歳): 道徳・政治学学士院の会員に選ばれる
- 1903年(44歳): 『形而上学・倫理学評論』に『**形而上学入門**』を発表
- 1904年(45歳): ジュネーブで開催された国際哲学会で「心理・生理的誤謬推理」を報告、コレージュ・ド・フランスでは、死去したガブリエル・タルドの後を継ぎ「現代哲学」の講座担当に
- 1907年(48歳): 『**創造的進化**』をアルカン書店から出版
- 1911年(52歳): ボローニャで開催された国際哲学会で「哲学的直観」と題する講演を行う、イギリスに講演旅行、ロンドン大学で「精神の本性について」、オクスフォード大学で「変化の知覚」、バーミンガム大学で「意識と生命」を講演
- 1912年(53歳): 「信仰と生活の会」で「心と身体」を講演、文化使節としてアメリカの大学に派遣
- 1913年(54歳): コロンビア大学で「一つの認識論の素描」「精神性と自由」の講演を行う、ロンドンの心霊研究会で「生きている人のまぼろしと心霊研究会」を講演、コレージュ・ド・フランスで「クロード・ベルナールの哲学」を講演
- 1914年(55歳): 道徳・政治学学士院の議長に選出、アカデミー・フランセーズの会員に選出、ベルクソンの著作がカソリックのインデックス(禁書目録⇒1966年に廃止)に登録される、第一次世界大戦勃発
- 1915年(56歳): 文化使節としてスペインに派遣され、マドリードで「哲学」と題する講演を行う、フランス文部省刊の『フランス科学』の「哲学」の項を担当
- 1917年(57歳): アカデミー・フランセーズ就任演説、文化使節として再びアメリカに派遣される
- 1919年(60歳): 文教最高会議の委員に任命される、論文集『**精神のエネルギー**』をアルカン書店より出版
- 1921年(62歳): コレージュ・ド・フランスに辞表を提出
- 1922年(63歳): コレージュ・ド・フランスの名誉教授となる、1月国際連盟の知的協力国際委員会の委員に任命され、8月に開催された第一回委員会で満場一致で議長に選出される、『**持続と同時性**』をアルカン書店より出版
- 1924年(65歳): リューマチの最初の発作に見舞われる
- 1925年(66歳): 健康上の理由から知的協力国際委員を辞任
- 1928年(69歳): ノーベル文学賞を受賞
- 1932年(73歳): 『**道徳と宗教の二つの源泉**』をアルカン書店より出版
- 1934年(75歳): 論文集『**思想と動くもの**』をアルカン書店より出版
- 1937年(78歳): 遺言書に署名
- 1939年(80歳): 第二次世界大戦勃発、ベルクソンはロワール、次いでダックスに疎開
- 1941年(81歳): 1月4日永眠

●遺言書（小林秀雄訳、『感想』より、漢字は新字体に、旧かなづかいは新かなづかいに修正）

世人に読んで貰いたいと思った凡てのものは、今日までに既に出版した事を声明する。将来、私の書類其の他のうちに発見されるあらゆる原稿、断片、の公表をここに、はっきりと禁止して置く。私の凡ての講義、授業、講演にして、聴講者のノート、或は私自身のノートの存するかぎり、その公表を禁ずる。私の書簡の公表も禁止する。J・ラシュリエの場合には、彼の書簡の公表が禁止されていたにも係わらず、学士院図書館の閲覧者の間では、自由な閲覧が許されていた。私の禁止がそういう風に解される事にも反対する。

●著作（原題と主な邦訳）

○Essai sur les données immédiates de la conscience (1889)

- ・『意識に直接与えられたものについての試論』ちくま学芸文庫、合田正人ほか訳
- ・『時間と自由』中村文郎訳、岩波文庫。旧訳は服部紀訳
- ・『時間と自由』平井啓之訳、白水Uブックス、旧「全集」版ほか

○Matière et Mémoire (1896)

- ・『物質と記憶』合田正人ほか訳、ちくま学芸文庫
- ・『物質と記憶』熊野純彦訳、岩波文庫。旧訳は高橋里美訳

○Le rire (1900)

- ・『笑い』林達夫訳、岩波文庫（ワイド版刊）。旧訳版の表記では『笑』（1938年）
- ・新訳「全集3」（白水社）は、副題に「喜劇的なものが指し示すものについての試論」。旧「全集」版は鈴木力衛・仲沢紀雄共訳
- ・『笑い』原章二訳、平凡社ライブラリー。ジークムント・フロイト「不気味なもの」ほかを併録
- ・『笑い』増田靖彦訳、光文社古典新訳文庫

○L'evolution créatrice (1907)

- ・『創造的進化』真方敬道訳、岩波文庫。（旧訳は2分冊）
- ・『創造的進化』合田正人ほか訳、ちくま学芸文庫

○L'energie spirituelle (1919) ※論文・講演集

- ・『精神のエネルギー』宇波彰訳、第三文明社〈レグルス文庫〉
- ・『精神のエネルギー』原章二訳、平凡社ライブラリー

○Durée et simultanéité (1922) ※アインシュタインの相対性理論を論じたもの

- ・『持続と同時性』旧全集版、花田圭介・加藤精司共訳

○Les deux sources de la morale et de la religion (1932)

- ・『道徳と宗教の二源泉』平山高次訳、岩波文庫。元版は芝書店（1936年）
- ・『道徳と宗教の二つの源泉』森口美都男訳、世界の名著・中公クラシックス（I・II）
- ・『道徳と宗教の二つの源泉』合田正人ほか訳、ちくま学芸文庫

○La pensée et le mouvant (1934) ※論文・講演集（1903～23）

- ・『思想と動くもの』河野与一訳、岩波文庫（解説木田元）。（旧訳は3分冊）
- ・『思考と運動』宇波彰訳、レグルス文庫（上・下）
- ・『思考と動き』原章二訳、平凡社ライブラリー

○Ecrits et paroles (1957-59) ※死後出版の論文集

- ・白水社『旧全集 第8・9巻（小論集I・II）』花田圭介編、花田圭介・加藤精司共訳に一部収録

○Oeuvres (1959) ※全集

- ・『ベルグソン全集』全9巻、白水社（初版1965-66）、訳者は中村雄二郎・矢内原伊作・田島節夫ほか多数、新装版は度々刊行。
- ・『新訳 ベルクソン全集』全7巻+別巻、竹内信夫訳、白水社
※著作の全訳で2010秋より刊行（2015現在5巻刊）

○Mélanges (1972) ※全集補巻

○Correspondances (2002) ※書簡集

- ・『ベルクソン書簡集』全3巻予定、合田正人監修／ボアグリオ治子訳（叢書ユニベルシタス・法政大学出版局）、2012-

○『ベルクソン講義録』全4巻、法政大学出版局 1999-2001 ※1890年代の「哲学史」ほかの講義録

○『記憶と生』ジル・ドゥルーズ編／前田英樹訳、未知谷 1999 ※抜粋論文集

○『哲学的直観 ほか』坂田徳男ほか訳、中公クラシックス 2002

- ※「思想と運動」、「精神のエネルギー」より論考5編

●日本語で読める参考文献

〈海外のベルクソン研究等の翻訳〉

- ・ハーマン『オイケンとベルグソンの哲学』山崎寿春・下野哲四郎訳、春敏堂、1914
- ・アルベール・チボーデ『ベルグソンの哲学』、高橋広江訳、三田文学出版部、1943
- ・ジャック・シュヴァリエ『ベルクソンとの対話』、仲沢紀雄訳、みすず書房、1969
- ・ガストン・バシュラール『瞬間と持続』、掛下栄一郎訳、紀伊国屋書店、1969
- ・スチュアート・ヒューズ『意識と社会 ヨーロッパ社会思想』、生松敬三・荒川幾男訳、1970
- ・スチュアート・ヒューズ『ふさがれた道 失意の時代のフランス社会思想』、生松敬三・荒川幾男訳、1970
- ・ジル・ドゥルーズ『ベルクソンの哲学』、宇波彰訳、法政大学出版会 叢書・ユニベルシタス、1974
- ・I.プリゴジン/I.スタンジェール『混沌からの秩序』伏見康治他訳、みすず書房、1987
- ・モーリス・アルヴァックス『集合的記憶』、小関藤一郎訳、行路社、1989
- ・ジル・ドゥルーズ『差異について』、平井啓之訳・解題、青土社、1992
- ・ジャン・ルイ＝ヴィエイヤール・パロン『ベルクソン』上村博訳、白水社 文庫クセジュ、1993
- ・ウラジーミル・ジャンケレヴィッチ『最初と最後のページ』、合田正人訳、みすず書房、1996
- ・ウラジミール・ジャンケレヴィッチ『増補新版 アンリ・ベルクソン』、阿部一智・桑田礼彰訳、新評論、1997
- ・マリー・カリウ『ベルクソンとバシュラール』、永野拓也訳、法政大学出版会 叢書・ユニベルシタス、2005
- ・ジル・ドゥルーズ『シネマ 2*時間イメージ』、宇野邦一・江澤健一郎・岡村民夫・石原 陽一郎・大原理志訳、法政大学出版会 叢書・ユニベルシタス、2006
- ・モーリス・メルロ＝ポンティ『心身の合一—マールブランシュとピランとベルクソンにおける』、滝浦静雄・中村文郎・砂原陽一訳、ちくま学芸文庫、2007
- ・ジル・ドゥルーズ『シネマ 1*運動イメージ』財津理・齋藤範訳、法政大学出版会 叢書・ユニベルシタス、2008
- ・ジャン＝リュック・ジリボン『不気味な笑い フロイトとベルクソン』、原章二訳、平凡社、2010

〈日本人によるベルクソン研究等 単著〉

- ・野村隈畔『ベルグソンと現代思潮』、大同館書店、1914
- ・中沢臨川『ベルグソン (近代文豪評伝)』、実業之日本社、1914
- ・北吟吉『ベルグソン哲学の解説及批判 第1編 (時間と自由意志・哲学入門)』、南北社、1914
- ・北吟吉『ベルグソン哲学の解説及批判 第2編 (物質と記憶・創造的進化)』、南北社、1914
- ・西田幾多郎『思索と体験』、千章館、1915 (「ベルグソンの哲学的方法論」を収録)
- ・伊達源一郎『ベルグソン』、徳富蘇峰監修、民友社 現代叢書第10冊、1915
- ・大杉榮『労働運動の哲学』、東雲堂書店 生活と藝術叢書第4編、1916
- ・左右田喜一郎『左右田喜一郎論文集 第1巻 (経済哲学の諸問題)』、佐藤出版部、1918 (「思想問題として見たるサンヂカリズム—ベルグソン哲学との交渉」を収録)
- ・堺利彦『猫のあくび』、松本商会出版部、1919 (「唯物論者の見たベルグソン」を収録)
- ・島為男『ベルグソン哲学と現代教育』、大同館書店、1926
- ・新渡戸稲造『東西相触れて』、実業之日本社、1928 (「哲人ベルグソン氏」を収録)
- ・西田幾多郎『現代に於ける理想主義の哲学』、弘道館、1933

- ・坂田徳男『ベルグソン創造の哲学』、河出書房、1937
- ・吉岡修一郎『ベルグソンと科学精神』、第一書房、1940
- ・安部光穂『ベルグソン哲学（上中下）』、建設社、1941
- ・九鬼周造『遠里丹婦麗天』、岩波書店、1941（「書齋漫筆」及び「回想のアンリ・ベルグソン」を収録）
- ・桑木巖翼『哲学史筋記』、小山書店、1943
- ・渡辺慧『時間』、白日書院、1947（1974に『時』と改題され河出書房新社より復刊）
- ・今井仙一『ベルグソン』、弘文堂、1949
- ・淡野安太郎『ベルグソン』、勁草書房、1958（1996に復刻版）
- ・小林秀雄『感想』、1958～1963『新潮』に連載、新潮社第五次小林秀雄全集（2002）別巻Iに収録
- ・中島盛夫『ベルグソンと現代』、塙書房 塙新書 18、1968
- ・澤瀉久敬『ベルグソンの科学論』学芸書房、1968、のち中公文庫、1979
- ・中田光雄『ベルクソン哲学 -実在と価値』、東京大学出版会、1977
- ・池辺義教『ベルクソンの哲学』、第三文明社 レグルス文庫、1985
- ・三宅中子『習慣と懐疑—モンテーニュ・パスカル・ベルクソン』、南窓社、1985
- ・澤瀉久敬『アンリ・ベルクソン』、中公文庫、1987
- ・市川浩『ベルクソン』、講談社学術文庫、1991、四大主著からの抜粋紹介あり
- ・大森荘蔵『時間と自我』青土社、1992
- ・大森荘蔵『時間と存在』青土社、1994
- ・佐藤光『ポラニーとベルグソン—世紀末の社会哲学』、MINERVA 人文・社会科学叢書、1994
- ・中村弓子『受肉の詩学—ベルクソン・クローデル・ジード』、みすず書房、1995
- ・山崎行太郎『小林秀雄とベルクソン「感想」を読む』、彩流社、1997
- ・篠原資明『漂流思考—ベルクソン哲学と現代芸術』、講談社学術文庫、1998
- ・清水誠『ベルクソンの靈魂論』、創文社、1999
- ・檜垣立哉『ベルクソンの哲学—生成する実在の肯定』、勁草書房、2000
- ・石垣優『時間を生きる—ベルクソンの時間をめぐって』、文芸社、2000
- ・石井敏夫『ベルクソンの記憶力理論—『物質と記憶』における精神と物質の存在証明』、理想社、2001
- ・筒井文隆『ベルクソンとカントの社会論—人心覚醒から世界平和へ』、近代文芸社、2002
- ・伊藤淑子『ベルクソンと自我—自我論を通して生命と宇宙、道徳と宗教を問う』、晃洋書房、2003
- ・金森修『ベルクソン 人は過去の奴隷なのだろうか』、NHK 出版 シリーズ・哲学のエッセンス、2003
- ・篠原資明『ベルクソン—“あいだ”の哲学の視点から』、岩波新書、2006
- ・杉山直樹『ベルクソン聴診する経験論』、創文社、2006
- ・守永直幹『未知なるものへの生成—ベルクソン生命哲学』、春秋社、2006
- ・郡司良夫『ベルクソン書誌—日本における研究の展開』、金沢文圃閣 文圃文献類従、2007
- ・戸島貴代志『創造と想起—可能的ベルクソニズム』、理想社、2007
- ・本田裕志『ベルクソン哲学における空間・延長・物質』、晃洋書房 龍谷叢書、2009
- ・中村弓子『心身の合一—ベルクソン哲学からキリスト教へ』、東信堂、2009
- ・永野拓也『ベルクソンにおける知性的認識と実在性』、北樹出版、2011
- ・菊谷和宏『「社会」の誕生 トクヴィル、デュルケーム、ベルクソンの社会思想史』、講談社選書メチエ、2011

- ・三宅岳史『ベルクソン哲学と科学との対話』、京都大学学術出版会 プリミエ・コレクション、2012
- ・渡辺哲夫『フロイトとベルクソン』、岩波書店、2012
- ・前田英樹『ベルクソン哲学の遺言』、岩波現代全書、2013
- ・塚田澄代『ベルクソンとマルセルにおける直接経験』、知泉書館、2013
- ・瀬名織江『哲学探偵ベルクソンの事件簿』、彩流社、2013（小説）
- ・中村昇『ベルクソン＝時間と空間の哲学』、講談社選書メチエ、2014
- ・大崎博『ベルクソンの道徳・宗教論』、成隆出版、2015

〈ベルクソン研究等のアンソロジー〉

- ・『ベルグソン研究』、坂田徳男・澤瀉久敬共編、勁草書房、1961
- ・『現代思想 9月臨時増刊 ベルクソン』、青土社、1994
- ・『ベルクソン読本』、久米博・中田光雄・安孫子信共編、法政大学出版局、2006（2013に新装版）
- ・『フッサールとベルクソン—生誕150年』、哲学会編纂、有斐閣 哲学雑誌第124巻第796号、2009

なお、CiNiiにおいて「ベルグソン」で230件、「ベルクソン」で868件の論文タイトルが該当論文としてヒットします。
 (2016年8月6日現在)

●仏語による参考文献（仏語版WikipediaのVoir aussiのBibliographyより）

- ・ Une bibliographie générale dans l'ordre chronologique de 1878 à 1952 se trouve dans le "Bergson éducateur" de Rose-Marie Mossé-Bastide, Paris, Presses Universitaires de France, 1955 p. 382-450.
- ・ Lydie Adolphe, L'Univers bergsonien, Paris, La Colombe, 1955.
- ・ François Azouvi, La Gloire de Bergson. Essai sur le magistère philosophique, Paris, Gallimard, coll. "NRF Essais", 2007.
- ・ Giuseppe Bianco, Après Bergson. Portrait de groupe avec philosophe, Paris, PUF, coll. "Philosophie Française contemporaine", 2015.
- ・ Georges Canguilhem, "Commentaire au troisième chapitre de L'Évolution créatrice", dans Annales bergsoniennes, t. III, Paris, Presses Universitaires de France, coll. "Épiméthée", 2007, p. 99-160.
- ・ Georges Canguilhem, « Le concept et la vie », Revue Philosophique de Louvain. Troisième série 64, 1966, p. 193-223.
- ・ Jacques Chevalier, Bergson, Paris, Plon, coll. "Les Maîtres de la pensée française", 1926 (réimpr. 1947).
- ・ Jacques Chevalier, Entretiens avec Bergson, Paris, Plon, 1959.
- ・ Gilles Deleuze, « La conception de la différence chez Bergson », Études bergsoniennes IV, Paris, Presses Universitaires de France, 1956, p. 77-112.
- ・ Gilles Deleuze, Le Bergsonisme, Presses Universitaires de France, coll. "Quadrige", 1963.
- ・ Pierre-Alexandre Fradet, Derrida-Bergson. Sur l'immédiateté, Hermann, Paris, coll. "Hermann Philosophie", 2014. ISBN 9782705688318
- ・ Arnaud François, Bergson, Paris, Ellipses, 2008.

- Arnaud François, Bergson, Schopenhauer, Nietzsche. Volonté et réalité, Paris, Presses Universitaires de France, 2008.
- Arnaud François (dir.), L'Évolution créatrice de Bergson, Paris, J. Vrin, coll. Études & commentaires, 2010.
- Henri Gouhier, Bergson dans l'histoire de la pensée occidentale, Paris, J. Vrin, coll. Bibliothèque d'histoire de la philosophie, 1989.
- Henri Gouhier, Bergson et le Christ des Évangiles, Paris, J. Vrin, coll. "Reprise", 1999 (3e éd.).
- Léon Husson, L'Intellectualisme de Bergson. Genèse et développement de la notion bergsonienne d'intuition, Paris, F. Alcan, 1947.
- Vladimir Jankélévitch, Henri Bergson, Paris, Presses Universitaires de France, coll. "Les Grands penseurs", 1959 (2e éd.).
- Nadia Yala Kisukidi, Bergson ou l'humanité créatrice, Paris, CNRS éditions, 2013.
- Patricia Lasserre, La théosophie de Jacob Böhme dans la philosophie en langue française (Louis-Claude de Saint-Martin, Nicolas Berdiaev, Henri Bergson).
- Louis Lavelle, "Henri Bergson", dans La Philosophie française entre les deux guerres, Paris, Aubier, 1942.
- Michel Lefevre, La Réhabilitation du temps. Bergson et les sciences d'aujourd'hui, Paris, L'Harmattan, 2005.
- Clélie de Lesquen, Des philosophes français et la Première guerre mondiale : Alain, Bergson, Péguy (mémoire de diplôme d'études approfondies en philosophie du droit, université Panthéon-Assas), Paris, chez l'auteur, 2001, 164 p. (OCLC 48495454)
- Jacques Maritain, La philosophie bergsonienne, Paris, Librairie Valois, 1930.
- Jacques Maritain, De Bergson à Thomas d'Aquin, Flammarion, 1947.
- Maurice Merleau-Ponty, « Bergson se faisant », dans Signes, Paris, Gallimard, 1960, p. 229-241.
- Maurice Merleau-Ponty, L'Union de l'âme et du corps chez Malebranche, Biran et Bergson. Notes prises au cours de Maurice Merleau-Ponty à l'École normale supérieure (1947-1948), recueillies et rédigées par Jean Deprun, Paris, J. Vrin, coll. "Bibliothèque des Textes Philosophiques", 1997 (nouvelle édition revue et augmentée d'un fragment inédit).
- Jean Milet, Bergson et le calcul infinitésimal ou la Raison et le temps, Paris, Presses Universitaires de France, coll. "Bibliothèque de philosophie contemporaine", 1974.
- Paul-Antoine Miquel, Bergson ou l'imagination métaphysique, Paris, Kimé, 2007.
- Charles Péguy, Note sur M. Bergson et la philosophie bergsonienne, Paris, Cahiers de la quinzaine, 15e série, cahier 8, 1915 (repris dans Œuvres en prose complètes, t. III, Paris, Gallimard, coll. "Bibliothèque de la Pléiade", 1992).
- Ioulia Podoroga, Penser en durée. Bergson au fil de ses images, Lausanne, L'Âge d'Homme, 2014.
- Bento Prado Jr., Présence et champ transcendantal. Conscience et négativité dans la philosophie de Bergson, trad. Renaud Barbaras, Hildesheim-Zürich-New York, G. Olms, coll. "Europaea memoria. Reihe I : Studien", 2002.
- Camille Riquier, Archéologie de Bergson, Paris, Presses Universitaires de France, coll. "Épiméthée", 2009.
- Philippe Soulez et Frédéric Worms, Bergson : biographie, Paris, Flammarion, coll. "Grandes biographies", 1997.
- Karl Sarafidis, Bergson. La création de soi par soi, Paris, Eyrolles, 2013.
- Albert Thibaudet, Le Bergsonisme (Trente ans de vie française, III), 2 vol., Paris, Éditions de la Nouvelle Revue française, 1923.
- Jean-Louis Vieillard-Baron, Bergson, collection « Que sais-je ? », PUF, 1991. Rééd. 1993 et 2007.

- ・ Jean-Louis Vieillard-Baron, *Bergson et le bergsonisme*, Paris, A. Colin, 1999.
- ・ Jean-Louis Vieillard-Baron, *Le Secret de Bergson*, Paris, éditions du Félin, 2013.
- ・ Ghislain Waterlot, *Bergson et la religion. Nouvelles perspectives sur Les Deux Sources de la morale et de la religion*, Paris, Presses Universitaires de France, 2008.
- ・ Frédéric Worms, *Bergson ou les deux sens de la vie*, Paris, Presses Universitaires de France, coll. "Quadrige", 2004.
- ・ Frédéric Worms, "La conception bergsonienne du temps", *Philosophie* 54, Paris, Éditions de Minuit, 1997, p. 73-91.
- ・ Frédéric Worms, *Introduction à Matière et mémoire de Bergson*, Paris, Presses Universitaires de France, coll. "Les Grands livres de la philosophie", 1997.
- ・ Frédéric Worms (dir.), *Annales bergsoniennes*, Paris, Presses Universitaires de France, coll. "Épiméthée", 2002- (6 vol. parus).

■ 「形而上学入門」の位置

「形而上学入門」は、1903年1月、*Revue de Métaphysique et de Morale* 『形而上学・倫理学評論』に発表された。この時、ベルクソンの四大主著の最初の二編、『意識に直接与えられたものについての試論』と『物質と記憶』、そして『笑い』といった著作は既に公刊されていたが、『創造的進化』と『道徳と宗教の二つの源泉』はまだ存在していない時代の作品である。当時ベルクソンは、コレージュ・ド・フランスの教授としてギリシア・ローマ哲学の講座を担当していた。

その後1934年にアルカン書店から『思想と動くもの』が刊行されるまで、フランスでは「形而上学入門」は簡単に読めない状態が続いていたが、各国語の翻訳では広く読まれてるといふ皮肉な状況にあった。この間約30年の時を隔てている訳だが、「形而上学入門」には『思想と動くもの』刊行時にベルクソン自身によって若干の訂正が施されている。

この訂正についてベルクソンは、冒頭に付された長い原注で、「形而上学と科学という用語の意味をもっと精確にする必要が感じられた」として、「知識が測量（量の測定）を目的としてその対象を扱う場合」（＝科学～物質の研究）と「知識が実在と共感することを目的とする場合」（＝形而上学・哲学～精神の研究）との間には明確な方向性の違いがあることを指摘し、前者では「空間化された時間と空間（on a affaire au temps spatialisé et à l'espace）」を、後者では「真の持続（durée réelle）」を問題としなければならず、そのことを明確化するためには、前者を「科学的」、後者を「形而上学的」と呼ぶのが便利に思われたからであるとしている。

また、この注の末尾では、この論文が執筆された時期には、カントの批判主義¹とその継承者たちの独断主義（新カント派？）²が広く一般に受け入れられていた点に注意を向けている。

¹ カントの批判主義：原章二によると、この当時のフランスの論壇では、アムランとブランシェヴィックによってカントの批判主義は代表されていたという。原章二訳『思考と動き』311～312頁の訳注1を参照。

² カントの継承者たちの独断主義：原章二は、同じ訳注で、「カントの継承者たちの独断主義」という言葉で、ベルクソンが念頭に置いていたのはフィヒテだとしている。なお、ここでは直接的に新カント派に対する言及はないが、同じころ隣国のドイツでは、新カント派の哲学が大きな潮流を形成していた。ヘーゲルの死後、オットー・リープマンがその著書『カントとその亜流』で発した「カントに帰れ（Zurück zu Kant!）」という標語がドイツを中心に広がりを見せ、その後、ヴィルヘルム・ヴィンデルバントにより西南ドイツ学派（バーデン学派）が創始されると、バーデン学派は新カント学派の最も有力な学派として発展し、新カント派は講壇哲学の中心的な流れを形成するに至る。これらの哲学は当時西欧を席卷しつつあったマルクス主義等の科学的思惟に対抗するものとして位置づけることができる。新カント派は、大きく西南ドイ

■ベルクソン「形而上学入門」

以下の小見出しは、ベルクソン自身が示した欄外見出しに基づく小見出しである。

テキストについては、河野与一訳（岩波文庫）、坂田徳男訳（世界の名著）、原章二訳（平凡社ライブラリー）を適宜参照したが、これらの邦訳の中では、原章二訳のものが最も新しく、新たな研究成果等を反映した訳注が適宜施され、読みやすくなっていると思われる。

□分析と直観 (Analyse et Intuition)

これまで哲学者たちが唱えてきた、形而上学についての様々な定義や絶対に関する諸概念³を比較してみると、対象を認識する仕方 (manières)⁴について、「根本から異なった二つの仕方」を区別している点では一致がみられる。

第一の仕方＝もの（対象）の周囲をまわる：視点と記号に依存⇒相対に留まる認識

第二の仕方＝もの（対象）の内部へ入り込む：視点を考えず、記号に頼らない⇒絶対に到達する認識

二つの例示

①空間のうちを運動する一つの物を知覚する（私の経験）

動く視点～対象を外部から認識：記号に翻訳：見地によって異なる知覚 (perception)

不動の視点～対象を内部から認識：翻訳を断念：共感と想像力による私自身への移し入れ

②物語られた小説のなかの人物の了解

小説の作者は、様々な言葉を用いてその登場人物を描写し、行動させることができるが、それらの個々の言葉は、（読者である）私とその人物と一致（合一）する瞬間 (je coïncidais un instant avec le personnage lui-même) に感じる単純で不可分な感情には及ばない。

だから、「人物にとって固有なもの、彼の本質的なものとは、定義上内的なものであり、外部からは知覚されようもなく、また他のあらゆるものと通約しえないので、記号では表現できない」。

それに対して、人物の「描写 (description)」「来歴 (histoire)」「分析 (analyse)」は常に私を相対のなかに留める。「人物との一致だけが私に絶対を与える」

このような意味においてのみ「絶対」は「完全」と同意語とされてきた。また、しばしば「無限」とも同一視されてきた。そして、それゆえに「絶対」は「直観」のうちにだけ与えられ、それ以外のすべては分析の領分に属する。

「直観」とは「対象そのものにおいて固有な唯一のもの、したがって言葉では表現しえないものと一致するために、対象の内部へ身を置く共感 (sympathie)⁵を意味している。」

ツ学派（バーデン学派）とマールブルク学派とに分けられる。前者を代表する哲学者としてはリッケルト、ラスク等を、後者を代表する哲学者としては、コーエン、ナートルプ、カッシーラー等を挙げることができる。

³ les conceptions de l'absolu : ベルクソンの「絶対〔者〕 (l'absolu)」という概念には、カントの「物自体 (ding an sich)」の意味、或いはカントの「物自体」に対する批判のニュアンスが含意されている場合がある。これ以降頻出する「絶対」という語を読む際には、この点に留意すべきである。なお、ベルクソン自身は「物自体」という用語は用いない。

⁴ manières : ここでは méthode (方法) ではなく、manières (やり方・仕方) という用語が使用されている。

⁵ sympathie : 1903年のテキストでは sympathie intellectuelle (知的共感) とされていた。

一方「分析」は「対象を既知の要素、他の対象と共通する要素に還元する操作である... 一切の分析は翻訳であり、記号への展開であり、新しい対象と既知の対象との接触を継起的な視点から記述して得られる表象である。

【方法としての直観】

ベルクソンの「直観」(Intuition)は、Bergsonismの方法論そのものであり、ドゥルーズは“Le Bergsonism”邦訳『ベルクソンの哲学』(宇波彰訳、法政大学出版局、1974(原著は1966))で、「直観は感情・靈感・混乱した共感ではなく、苦心してつくられたひとつの方法であり」そこには、以下に示すような厳密な3つの規則(+2つの補足的規則)があると述べている。

第一の規則：問題そのもののなかで真偽の検証を行ない、にせの問題を否定し、問題のレベルにおいて真理と創造を調和させる。

補足的規則①：にせの問題には二種類ある。ひとつは《存在しない問題》であって、それは関係項自体が《多》と《少》の混乱を含んでいることによって規定されている。もう一つは、《提起の仕方のよくない問題》であり、これはその関係項がよくない分析をされている混合物を表象しているということによって規定される。

第二の規則：幻想とたたかい、真の質的差異または実在の区分を見出す。

補足的規則②：現実的なものは自然的な区分または質的な差異によってのみ切断されるのではなく、ひとつの観念的または潜在的な点へと集中するいくつかの道にしたがっても切断される。

第三の規則：空間によってではなく、むしろ時間によって問題を提起し、解決する。

(『ベルクソンの哲学』5-29頁)

ドゥルーズによれば、ベルクソン哲学の「直観」は、「本質的に、問題を提起し(にせの問題の批判と真の問題の作成)、差異化し(切断と分割)、時間化する(持続を媒介として考える)方法である。」

ドゥルーズはまた、これに先立つこと10年前に発表された“La conception de la différence chez Bergson”邦訳『差異について』(平井啓之訳、青土社、1992(原著は1956))では、ベルクソンの「直観」について、以下のように記している。

++ 直観とは差異の享受である。しかし、それは単に方法の結果の享受であるのみでなく、それ自体が方法である。方法として、直観は唯一の行為ではなく、複数の行為、複数の努力と方向とをわれわれに提示する。直観の第一の努力とは本性の差異の確定である。そしてこの差異は事物相互の間にあるので、問題はいわば真の区分にかかわり、区分が問題になる。現実をその分節にしたがって分けねばならない。(『差異について』14-15頁)

実証科学は分析を通常の機能とし、記号に基づいて作業する。これに対して、実在(réalité)を絶対的に把握し、内部に入り直観する手段があるとすれば、それこそはまさに形而上学である。「すなわち、形而上学は記号なしにすまそうとする科学である。」と、ベルクソンは位置づける。

□持続と意識 (Durée et Conscience)

私たち自身が内から直観によって把握することができる実在として、時間を通じて流れる私たち自身の人格、持続する私たちの自我 (moi) を挙げるができる。

私の自我を仮に活動しない停止したものとして、そこに私の意識の内的な眼差しを向けると、そこにはまず、物質世界からやってくるさまざまな知覚を認めることができる。次に、知覚に付着し、知覚を解釈するのに役立つ記憶 (mémoire) があり、さらにそれらの知覚や記憶と結びついた諸傾向、運動的な習慣、潜在的な行動の群れのあらわれを見出すことができる。

しかし、そのさらに向こう、「自我の底 (au fond de moi)」に、もっとも全面的、恒常的、かつ持続的に自分自身であるものを求めると、どのような流れとも比べられない連続的な流れが見出される。それは継起する諸状態 (états) であり、そのいずれの状態も次にくる状態を予告し、先立つ状態を含んでいる。だが、それが多様な状態を形成していることを指摘できるのは、私がそれらをすでに経験し、それらの痕跡を見ようとして背後をふり向くときであり、私がそれらを経験している最中には、それらは共通の生命を深く吹き込まれて、緊密に有機的に結びつき、その一つがどこで終わり、もう一つがどこで始まるかを、私は言うことはできない⁶、とベルクソンはいう。

ベルクソンはさらに、「巻物」「無数の色合いをもつスペクトル」「無限に小さな弾性体が、数学的な点にまで縮小したもの」といったイメージを並べて見せるが、それらのイメージはいずれにしても不完全であるという。それは、持続の展開はある面では進行する運動の単一性に、また別の面では多様な状態のひろがりに似ているが、どんな比喩をもってしても、その二面の一方を犠牲にせずにもう一方を表現することはできないからであり、イメージであらわすことは不可能だという。

さらに、イメージよりも抽象的で、一般的で、単純な概念では、なおさらそれ (持続) をうまく表現できない。しかし、そもそも、私自身の流れについて私自身がもつ根源的な感情＝「持続の直観」は表現される必要がない。なぜなら、自分の存在の持続を直観できない人には、どのような概念やイメージをもってしても、それを与えることはできないからである。

ここで哲学者が意図できる唯一のことは、生活上の心的習慣によって妨げられている努力を促すことにある。つまり、イメージを持続の直観にとって代えることはできないが、多様なイメージの作用を集中させて直観をとらえるその点に意識の作用を差し向けることはできる。それは、意識の同意のもとで、集められたイメージに向けて精神の緊張を引き出すようにする努力である。

これに対して、単純すぎる概念的理解のまずさは、それが記号であり、したがって対象そのもの (ドゥルーズであれば「本性の差異」というであろうか) にとってかわり、私たち (の意識) に何の努力も要求しないからである。

どのような概念も、対象とそれに似た対象との比較しかあらわしていない。比較は対象の類似をひき出すが、類似は対象の性質であり、性質はその対象の部分と見えるので、私たちは概念に概念を並べ、対象の全体を部分で再構成することによって、いわば知的な等価物を入手できると簡単に信じ込む。こうして、一、多、連続、有限または無限の分割、というような概念を並べ立て、持続の忠実な表象をつくり出せると思うのだ。まさにここに錯覚がある、とベルクソンはいう。

⁶ ベルクソンの意図に反することになるかもしれないが、概念的比較を行なえば、このような論法には、アウグスティヌスが『告白』で展開した時間論のそれとの類似を認めることができる。『告白』(岩波文庫 下巻 109-140 頁 第 11 巻第 11 章～第 29 章) を参照。

抽象的な観念は分析、つまり科学的研究には役立つが、直観の代わりにはならない。対象を、その本質的かつ固有なところでとらえようとする形而上学的探究の代わりにはならないのだ。このように実在を概念でとらえようとして、その影だけつかんでいることは虚しいだけではなく、概念が対象の性質を一般化することで、対象の特殊な性質を記号化し、拡大し、変形させてしまうという危険をとまなう。

対象から引き出されるこのような概念は、重みを持たず、物体の影でしかないが、そのような影から、無数の体系が生じてしまう。そうして単純な概念は哲学を異なった学派に分割し、終わりのない戦いに赴かせるが、そのような概念の作用は形而上学にとって有害で危険なものである。

もちろん、形而上学にも概念は必要である。科学はごくふつうに概念に基づいて仕事をしており、形而上学は、それらの諸科学なしにすませることはできない。しかし、形而上学の本来の面目は、概念をこえ、あるいは少なくとも、こわばった出来合いの概念から自由になり、いつも私たちが手にしているものとはまるで違う概念、しなやかで、よく動き、ほとんど流動的であり、直観のとらえがたい形にいつでも型を合わせるような表象を創造するところにある。

持続は直観のなかに直接に示され、イメージによって間接に示唆され、本来の概念という言葉の意味における概念的な表象のなかに閉じ込められないことを前提として、持続を多 (*multiplicité* : 多様性) としてみる。すると、多を構成する各項は、互いに区別される項ではなく、浸食し合っている項である、といわなければならない。持続を物象化し分割しその数を数えることはできるが、その作業は凝固した持続の記憶に対してなされるものに過ぎないのであり、持続そのものに対してなし得ることではない。したがって、持続が多であるとしたら、他の何ものにも似ていない多である。

では、持続を一 (*unité* : 統一性、単一性) としてみよう。なるほど、その要素同士が相互に溶け込んで連続しているものは一とみなすべきものかもしれない。しかし、そのように動き、変化し、精彩があり、生き生きとしている一は、純粋な統一という概念で限定されるような、抽象的で、不動で、空虚な一とほとんど似たところはない。

さらに、持続は多と一が同時に定義されると結論してみても、この二つの概念をどのように巧みに操り、割合を調合して工夫をこらし、さまざまな組み合わせを試してみようとも、私がつ持続の単純な直観に似たものは決して手に入らない。⁷

⁷ このような、「持続は一か多か」という問題設定については、ドゥルーズも『ベルクソンの哲学』で取り上げている。ドゥルーズによれば、ベルクソンが『意識に直接与えられたものの試論』以来提起していたのは《多様性》の二つのタイプをわれわれに示すことであり、多と一を対立させるのではなく、二つのタイプの多様性を区別することである。「そのうちのひとつは空間によって表象される（あるいはむしろ、あらゆるニュアンスを考慮に入れるならば同質的な時間の不純な混同によって表象される）。それは外在性・同時性・並置・秩序・質的差異・段階的差異の多様性であり、悲連続で実在する数的な多様性である。もうひとつのタイプは純粋な持続として存在する。それは継起・融合・組織化・異質性・質的区別または質的差異の内的多様性である。」(宇波彰訳『ベルクソンの哲学』34頁)

また、この問題は、物理学者・数学者のリーマンが提起した多様性の理論までさかのぼるものともされている。「リーマンは物をその次元つまり独立変数を関数として規定される《多様性》として定義し、また、不連続な多様性と連続した多様性とを区別した。」(同前 35頁)

さらに、リーマン、アインシュタインとの対決の書である『持続と同時性』で「ベルクソンは、持続についての哲学的な見方を、空間についての科学的な概念と対立させることでは満足しなかった。彼はこの問題を二種類の多様性の領域に置き、持続に固有の多様性は、科学の明確さと同じほどの《明確さ》を持っていると考え、さらに、この多様性は科学に反応すべきであり、リーマンとアインシュタインのたどった道とは必然的に混同されないひとつの道を科学のために開くべきだと考えた。ベルクソンが多様性の概念を借りて、その範囲と拡がりとを新たにした仕方をきわめて重要なものと考えなくてはならないのはそのためである。」(同前 36頁)

私たちは持続のなかに入っていく。そして、それは直観によるほかはない。この意味において、自我の持続の、自我自身による内的で、絶対的な認識は可能である。問題は、直観の役割と分析の役割を混同するところから、学派間の論争が起こり、体系同士の争いが生じている点にある。

□構成的部分と部分的表現 (Des parties composantes et des expressions partielles)

心理学はほかの科学と同様に、分析によってことを処理している。最初は単純な直観のなかにも与えられた自我を、感覚、感情、表象などに分解し、それらを別々に研究している。だが、そのように分解された要素は、果たして部分であろうか、というのがベルクソンの問題設定である。

どのような心理状態も、それが人のものである以上、人格の全体を反映するものであることは否定しがたい。どんなに単純な感情でも、その感情をもつ人の過去と現在を潜在的に含み、その体から切り離せず、抽象または分析の力を借りずには「状態 (état)」にならない。

心理学者は、人物のもつ特殊な色彩を無視し、単純化した人間のなかで、興味ある研究になりそうな面を分離し、自我の特殊な面を心理的事実とみなす。ベルクソンはそのような心理学者の立場を、ノートルダム寺院の塔をスケッチしにパリにやってきた画家や、知らない詩を構成する文字がでたらめにかき混ぜられて示された場合に喩えてみせる。

□経験論と合理論 (Empirisme et Rationalisme)

そして、それらの例は、自我を心理状態で構成しようとする哲学者たち (経験論者や合理論者) は、部分的な記号を実在の部分と考え、分析の視点と直観の視点を混同し、科学と形而上学を混同している、というのだ。

経験論者が、心理学的分析が自我のなかに見出すのは心理状態だけである、というのは正しい。しかしその結果見出された心理状態とは、元の直観を思い出させる符号、ただの書きとめられた言葉に過ぎない。そのような場に留まりながら、言葉の背後にもものがあると考えるのは大きな誤りである。心理学をしながら心理学者であることに甘んじえなかったテーヌ⁸やスチュアート・ミル⁹の犯した誤りがそのような誤りである。

したがって、哲学上の経験論は直観と分析の混同から生まれている。翻訳のなかにも原文がありえないことは当然なのに、そこに原文がないと言って原文を否定しているのだ。経験論は必然的にさまざまなものを否定することになるが、そこをよく見ると、その否定は分析は直観ではないと言っているに過ぎない。非常に漠然とした元の直観から対象をもらおうと、すぐさま分析に移り、対象を眺める視点を増やし、視点をすべて組み合わせれば対象を再構成できるとたちまち信じる。

しかし、合理論も同様の錯覚に陥っている。経験論と同じように心理状態を自我の断片と見なし、それをつなぎ合わせて自我の統一性をつくり出そうとしている。ただし、経験論が心理状態の多様性以外には何も無いと言うのに対して、合理論はあくまで自我の統一性に固執する。

⁸ テーヌ : Hippolyte Taine, 1828-1893, 19 世紀後半のフランスの代表的な哲学者・歴史家・評論家。「人種」「時代」「環境」の三大要素を骨子とした実証的・合理的、あるいは決定論的な批評や方法論を展開した。『物質と記憶』はテーヌの『知性論』(De l'intelligence, 1870) に対する反論として読めるともいわれている。(原章二訳 : 訳注 10 より)

⁹ ジョン・スチュアート・ミル : John Stuart Mill, 1806-1873, イギリスの思想家・経済学者。ジェームズ・ミルの長男。イギリス経験論の代表的な思想家であるヒュームが提唱した「観念連合論」は観念と観念の連合・連想によって思考内容が形成されるとした学説で、ミル父子や、初期のベルクソンが強い影響を受けたハーバート・スペンサー、フランスではテーヌやリボーに影響を与えた。

しかし、自我の統一性を心理状態そのものの場に求め、分析によって発見された性質や規定をすべて心理状態のものとしてせざるをえない以上（なぜなら分析は本来的につねに状態にいたるので）、合理論としての自我の統一性が純粹に否定的なものになり、あらゆる規定の欠如でしかなくなるのは道理である。分析においては、質料的な様相を呈するものはすべて、心理状態の側に取りられている。そうなれば、「自我の統一」はもはや、質料のない形相以外のものではなくなる。それは絶対に無規定で空虚なものである。

経験論と合理論の唯一の差異は、経験論者にとっては、自我から切り離された影のような心理状態を集めたものが自我の等価物であったのに対し、合理論者は自我を再生しようとして、影のようなそれらの心理状態に、よりいっそう非現実的なもの、いわば影がそこで動いている空虚、影のための場所のようなものを付け加える。

したがって、テーヌの言うような「経験論」とドイツのある汎神論者たちの極端な超越論とのあいだの距離は、想像されるほど大きくはない。この二つの場合、方法は類似している。すなわち、翻訳の要素を原文の部分と見なして推論をしているのだ。しかし、真の経験論は、できるかぎり原文そのものに迫り、その生命を深くさぐり、一種の精神的聴診（*auscultation spirituelle*）¹⁰によって、その魂の脈動を感じ取ろうとするものである。そのような真の経験論が真の形而上学である。その仕事は極度に困難だ。なぜなら、思考が日常の操作に使う既成概念はどれ一つとして役に立たない。その名に値する経験論は、対象について、その対象だけにしか合わない概念を裁断する。一つのものにしか当てはまらない以上、まだ概念であると言えるのかどうかかわからないような概念¹¹である。

自我に統一性のあることはたしかである。しかし、そのように言うだけでは、自我の統一という驚くべき性質について何も言ったことにならない。自我が多様であることに私は同意する。しかし、その多様性が他の何ものとも共通しないものであることを認めなくてはならない。哲学にとって真に重要なのは、自我という多様な統一性がどのような統一であり、どのような多様であり、抽象的な統一と多様性をこえたどのような実在であるかを知ることだ。

概念はふつう対をなし、対立する二つのものを示している。どのような具体的実在も、相反する二つの視点から同時に見ることができ、したがって、対立する二つの概念に包摂できる。ここから、定立と反定立を和解させようとするむだな努力がなされるが、概念や視点でものをつくることは決してできない。しかし、直観でとらえた対象からは、たいていの場合、二つの反対概念に容易に移行できる。

そのためには、知性の通常の働きを転倒させる必要がある。考えるとは通常、事物（*chose*）から概念へではなく、概念から事物へ進むことである。知性の正常な働きが利害にとらわれたものであることを認めよう。一般に人は、立場を決め、利益を得、関心を満たすために認識している。そのような可能的行動

¹⁰ 1903年版のテキストでは知的聴診（*auscultation intellectuelle*）となっていた。（原章二訳：訳注11）

¹¹ このようなベルクソンの概念に関する考え方は、他にも幾つかの箇所で見られるが、このような概念に対する考え方から、ドゥルーズの「差異（*différence*）」という考え方が立ち上げられている。若きドゥルーズは『差異について』で次のように述べている。「彼が拒否するのは、類あるいは範疇のなかに、つまり空間のなかにとどめておく区分法である。根拠は個物にまで到達しなければならず、真の概念はそのものにまで、了解は〈このもの〉にまで到達しなければならない。何ゆえにあれでなくてこれであるか、ベルクソンはつねにこの差異の問題を提出する。何ゆえに、或る知覚は、乙の回想よりも甲の回想を喚起するのであろうか。何ゆえに知覚は或る振動数を、何ゆえに乙の振動数よりも甲の振動数を〈取り込もう〉とするのか。何ゆえに持続のしかじかの緊張があるのか。じつはその理由こそベルクソンがニュアンスと呼ぶものの理由でなければならない。心的生活には偶有性はない。それでニュアンスは本質なのだ。その対象そのものにぴったり当てはまる概念、つまり〈唯一無二の概念〉を見出せぬかぎり、人間は、「その対象物がそれを分有しているとみなされる」複数の概念、一般概念によって、その対象を説明するに甘んずる。そのとき見逃されてしまうものは、その対象が同じ類の他のものであるよりもむしろこのものであること、その類のなかにあつてそれがそれ以外の割合ではなくてむしろこの割合をもつということ、である。」（平井啓之訳『差異について』32-34頁）

や態度が私たちの思考の概念的な方向であり、そしてそれは一度にすべて決定され、後はそれについていくだけである。概念を事物に適用するとは、まさにそうしたことである。

本来の意味における認識は、すべてある一定の方向に向けられているか、あるいは一定の視点から得られている。私たちの関心は多くの場合単純ではないので、私たちは同じ事物を多方向から認識し、視点をさまざまに変える。対象はそのとき唯一の概念ではなく、それが「分有する」とみなされる多数の概念に包摂される。いったいなぜ、対象がそれらの概念を同時にすべて分有するのかという問いは、実践にとっては必要ではなく、したがってわざわざ提起されることはない。

しかし、そのやり方 (*modus operandi*¹²) を哲学にもち込むことは、狙う目的に背を向け、哲学を学派間の永遠の対立にひき込み、対象と方法の真ん中に矛盾を投げ込むことである。いかなる事物認識も利益獲得に向けられた実用的なものであるか、それとも哲学は対象そのものの内部に直観の努力によって身を置くことであるか、その二つに一つしかない。

□実在する持続 (Durée de Réelle)

けれども、その直観の性質を知り、直観がどこで終わり、分析がどこに始まるかを正確に決定するには、持続の流れについて先に触れたこと¹³に立ち返る必要がある。

科学本来の発展に必要な堅固な作業台は、十分な分析によってもたらされた概念や図式の不動とみなされる要素のなかにもみ見出される。

しかし、どんな単純なものであれ、気分はいつでも変化している。なぜなら、記憶力を欠く意識はなく、過去の瞬間の記憶を現在の感情に付加しない状態が続くことはないからだ。そこに持続がある。内的な持続とは、過去を現在に延長する記憶力による連続した生命である。いずれにせよ、現在における過去のこの残存なしには持続はなく、ただ瞬間があるだけになるだろう。¹⁴

¹² ラテン語、直訳すると「操作の方法」という意味になるが、しばしば犯罪捜査やビジネス上の調査の文脈で使用される慣用語である。

¹³ 「持続と意識」の項

¹⁴ ここで、ベルクソンに対するバシュラールの反論を見ておくことも無駄ではないだろう。バシュラールは、その著書『瞬間と持続』(L'intuition de L'instant, 1932: 直訳では「瞬間の直観」、ただし本書が出版された時点では『思想と動くもの』はまだ出版されていない。)で、ガストン・ルプネル (Gaston Roupnel, 1871-1946、ディジョン大学教授、作家、郷土史家、ブルゴーニュの田園を背景とした多くの論文や小説を残しているという)の『シロエ』(Siroë)という著作を一つの論拠として、ベルクソンの持続に対して瞬間の直観を強調する反論を試みている。その冒頭でバシュラールは次のように記している、「「時間は瞬間の現実というただひとつの現実をしか持たない」というのが、ルプネル氏の著作を決定的に支配する形而上学的理念である。別の言い方をすれば、時間とは、瞬間の中に閉じこめられ、二つの虚無の間に吊るされた現実である。もちろん、時間の再生は可能であろうが、そのためには、時間はひとまず死なねばならないだろう。つまり時間は、持続をつくり出すために、ある瞬間における自分自身の存在を、別の瞬間に移しかえることはできないのである。瞬間、それはすでに孤独なものである。」(掛下栄一郎訳『瞬間と持続』11-12頁)

また、「要約すると、ベルクソンの直観——それについては、いかなる場所においても非難したつもりは毛頭ないが——運動の中で把握された持続それ自体について、たとえひとがどう考えようと、持続は別にしても、少なくとも「瞬間」に対してははっきりとした現実性をあたえねばなるまい。そればかりかわれわれは、意識に「直接あたえられたもの」として考えられた持続の学説に対する論争を、ふたたびここにとりあげる機会を持つことになるだろう。そのためわれわれは、ルプネル氏の直観を利用しながら、いかにして持続のない瞬間によって持続が構成されるかを示すことになるだろう。思うにそのばあいこのことはまた、まったく明確な形で、瞬間の始原的、形而上学的性格と、したがって持続の間接的、媒介的性格を証拠立てることになるだろう。」(同前 20頁)

なお、このバシュラールの論駁について、前田英樹は『ベルクソンの遺言』で次のように書いている。「ベルクソンはこうした種類の議論には、まずまったく興味を持つまい。バシュラールの言う「瞬間」は、彼が自分の生を捉えようとする時の好みの概念なのであって、彼はありふれた生のなかに突然現れる絶対の孤立、不連続な飛躍や詩的創造の特異な強度といったものを思索することが好きなのである。好きと言って悪ければ、そういう性向を通してすべてを考える、と言い直してもいい。彼にとっては、現代物理学の主題もまた決してこの範疇を逃れなかった。「瞬間」は、彼が立てているひとつの価値基準であり、それは生きる自覚や態勢の問題に結びついている。(改行)バシュラールが「瞬間の哲学」を好んだ

状態そのものは不断の生成である。私はその生成から平均的な性質を抽出し、それを変化しないものと仮定している。そのようにして私は、安定的な、したがって図式的な状態を構成しているのだ。他方において私は、不断の生成から生成一般（le devenir en général）を抽出したが、それはもはやこの生成でもなくあの生成でもない。それこそは私が状態の占める時間と呼んだものだ。ここをよく見れば、その抽象的な時間が私にとって、私がそこに位置づけた状態と同じく不動なものであり、連続的な質的变化によらなければ流れることのできないものであり、したがって、もしそれが性質を欠き、変化の単なる舞台にすぎないものならば、それによってそれがまさに不動の場となることがわかる。等質的な時間というこの仮説は、さまざまな具体的な持続相互の比較を容易にし、同時性を数えさせ、ある持続の流れを別の持続の流れに対して測定することを可能にするだけのものなのだ。

すなわち分析は不動のものに働きかけ、それに対して直観は動きのなか、あるいは同じことだが持続のなかに身を置くのである。ここに直観と分析との明快な境界線がある。私たちは実在的なもの、生きているもの、具体的なものを、それが可変性そのものであるという点において認める。要素とは図式であり、単純化された再構築物であり、たいていの場合は記号であり、いずれにせよ、流れる実在に向けられた一つの眺めであり、定義からいって変化しないものである。

図式的なもので実在的なものを再構成できると思うのは誤りである。これはいくら繰り返して言ってもいい。直観からは分析に移行できるが、分析からは直観に移行できない。

等質性にもっとも近い可変性である空間における運動について考えてみると、私はその運動にそって、可能な停止をいくらでも想像できる。私はそれらを運動体の位置、あるいは運動体が通過する点と呼ぶ。しかし、それらの位置をいくら集めても私は運動をつくることはできない。それらの点は運動の部分ではなく、運動に対してとられた眺めだからだ。それらはいわば停止の仮構にすぎない。実際は、運動体はどの点のうちにもいない。運動体はそこを通過するとせいぜい言えるだけである。

ところが、運動について、そして運動によって表象される時間について推理するたびに、私たちは精神に深く根づいた錯覚によって、どうしても分析を直観の等価物と考えてしまい、運動にそった一定数の可能な停止または点を見出し、それを否定なしに運動の部分とするのである。そして最後には、運動は点から成っているが、それに加えて一つの位置から次の位置への不明瞭で神秘的な移行を含んでいると言うのである。その不明瞭さが、動きよりも不動を明瞭とし、運動よりも停止が先にあると見なしたことからくるのではないかのよう。その神秘さが、運動から弛緩と不動へは簡単に移行できるのに、停止から運動をつくろうという不可能から生じたのではないかのよう。¹⁵

私たちはふつう不動のなかに腰を据え、そこに実践のための支点を見だし、不動によって動きを構成しようと試みる。それでは実在的運動の模倣である不細工なイミテーションしか得られないが、しかしそ

ように、ベルクソンは「持続の哲学」を好んだのではない。ふたつの「哲学」の対比は、それがどんなに厳めしい外見をとってようと、言葉の遊戯の域を出ない。そもそも、ベルクソンは「持続の哲学」などというものを発明して得意になっていたのではない。繰り返して言うが、「持続」はベルクソンが驚愕のうちに見出した思考の障害物だった。これを取り除くことが、科学であるのか、哲学であるのか、あるいはまったく別な何ものかになるのか、彼には皆目わからなかったのである。わかっていたのは、これを取り除かなくては先へは進めないことだけだ。」（2013年8月、岩波書店、41-42頁）

¹⁵ 1903年版のテキストでは、「かのうように。」で終わる文の後に、「運動のなかにこそ、最も単純で最も明瞭なものを見るように慣れなければならないのであり、不動は運動と弛緩の極限であるにすぎない。その極限はおそらく単に思考されるだけのものであり、自然の内部で実現されることは決してない。」という一文が入っている。この文を削除したということは、『創造的進化』（1907年）以降のベルクソンが、そのような「極限」を単に「考えられる」だけのものではなく、「自然のなかで空間において実現される」ものでありうると判断したことを示していると校訂版の注はいつている。（原章二訳：訳注13）

のイミテーションは生活のなかで事物そのものの直観よりもずっと役立つ。そのため不動は動きよりも明瞭で、停止は運動よりも先にあると思われているのだ。

古代このかた、運動の問題がひき起こした諸々の困難はここに由来している。そうした困難はつねに、空間で運動を、経路で経過を、不動の位置で動きを構成しようとするところに基づいている。しかし、運動は不動より先にあり、位置と移動のあいだにあるのは部分と全体の関係ではなく、可能な視点の多様性と対象の実在的な分割不可能性の関係である。

不動な点と運動体の運動との関係は、さまざまな性質を表す概念と対象の質的变化との関係と同じである。ある質的变化を分析して得られる諸概念は、不安定な実在に対する安定的な眺めである。だが、実在の動きに対して、不動の視点を与えるようにつくられた方法を適用することは、形而上学の本来の面目を忘れることである。形而上学が可能であるとするならば、それは思考の自然の坂道を登り、精神をふくらませて、自分の学ぶもののなかにただちに身を置き、概念から実在へではなく、実在から概念へ進む努力¹⁶によるものでしかありえない。

しかし、形而上学が直観によって進まなければならない、直観の対象が実在の動きであり、そして実在が心理学的な本質をもつものだとすると、それは哲学者をもっぱら自己観照のなかに閉じこめることにならにだろうか。「水の流れを見ている眠たげな牧童のように」¹⁷、哲学をただ生きている自分を眺めるようなことにしてしまわないだろうか。それは持続の独特な本質と形而上学的な直観の本質的に活動的な性格を見誤ることだろう¹⁸。それはまた、私のいう方法だけが、観念論 (idéalisme) と実在論 (réalisme)¹⁹ をこえ、私たちの上と下にある対象の実在を肯定し、しかもそれらがある意味で私たちの内にあることを認め、それらを一緒に困難なく共存させ、大問題のまわりに分析が積み重ねた難点をしだいに消散させていくのを理解しないことであろう。

持続を分析しようとする、私は否応なく持続一般のうえに対立する二つの眺めを取り、それを組み合わせさせて持続を考えていくことになる。その場合、一方には継起する意識状態の多様性があり、他方にはそれらを結びつける統一性があると言うだろう。こうして持続は多様性と統一性の「総合 (synthèse)」であることになり、その総合は神秘的な作業となる。繰り返すが、どうしてそれがニュアンス (nuances) と程度 (degrés) を受け入れることになるのかわからない。この仮説によれば、持続は、私たちの意識が習慣的にそのなかで働く持続しかありえないことになる。

¹⁶ 1903年版のテキストでは、「辛い、痛みをさえ伴う努力」とある。校訂版の注は、クサヴィエ・ティリエットの解釈 (Xavier Tilliette, *L'intuition intellectuelle de Kant à Hegel*, Paris, 1995, p.205) を紹介し、ベルクソンは表現を柔げることによってフィヒテやシェリング、とくに後者における神秘的な直観とは違って、自分のいう形而上学的直観が単純性そのものであることを述べようとしていると書いている。(原章二訳：訳注 14)

¹⁷ ミュッセ (Alfred de Musset) の詩「Rolla」の一節

¹⁸ 1903年版のテキストでは「形而上学的直観の本質的に活動的な、ほとんど激しいと言えるような性格」とある。これも注 16 で示したものと同方向で解釈すべき訂正であろう。(原章二訳：訳注 16)

¹⁹ この実在論と観念論は、先に心理学的観点から述べられた経験論と合理論の対比とは違って、『物質と記憶』で述べられている形而上学的観点からのものである。(原章二訳：訳注 17) なお、『物質と記憶』の該当箇所のさわりの部分を引用しておく。「どんな哲学的学説も、同じイマージュが同時に二つの異なった体系に入りこみうることに異議を挿むものはない。一つの体系は科学に属し、そこでは各々のイマージュがそれ自身にのみ関係づけられて、絶対的価値を保持している。いまひとつの体系は意識の世界であり、ここではすべてのイマージュが中心にある一つのイマージュ、すなわち私たちの身体に従って規定され、そのさまざまな変化を追う。そこで、実在論と観念論の間に提起される問題は、いまやすこぶる明らかになる。この二つのイマージュの体系が互いに結んでいる関係は、どのようなものか、ということなのだ。そして主観的観念論が第一の体系を第二の体系から導き出そうとするものであること、唯物論的実在論が第二のそれを第一のそれから導き出そうとするものであることは、見やすい道理である。」(白水社「ベルグソン全集 2」、1965年、田島節夫訳、29-30頁)

この点をはっきりさせるため、空間で遂行される運動という形で持続を考え、その運動を時間の表象として考えて概念に還元してみよう。すると私たちは一方で好きなだけ多数の経路上の点を、他方でそれらの点を結びつける抽象的な統一を手に入れるだろう。この抽象的な多様性と統一性の結合は、ちょうど算術で与えられた数の和がニュアンスを受けつけないのと同様に、ニュアンスを少しも帯びていない。直観によって持続のなかに入れば、はっきり決まったある緊張の感じが得られ、しかもその決まりかたが無限に多くの可能な持続からの一つを選択として見えてくる。

より正確には、持続を一本の糸で貫かれた多数の瞬間の統一と見なすと、どんな短い持続であろうと、それを構成する瞬間の数は無限となる。そのような数学的な点と点とあいだには、他の数学的な点がつねに存在することになる。したがって、多数性の側から眺めると、持続は埃のような瞬間のなかに姿を消す。

他方、そのような瞬間を結合する統一を考えても、それもまた持続できない。なぜなら、持続において本来的に持続し変化するのは、仮説によって、すべて瞬間の多数性のほうへ入れられている。したがってこの統一は、本質を明かせば明かすほど、動くものの何か不動の基体として、時間の何か非時間の本質としてあらわれてくる。私はそれを永遠、といっても死の永遠 (*éternité de mort*) と呼ぶだろう。なぜなら、それは生命である動きを抜き取られた運動にほかならないからだ。

この二つの形而上学のどちらに向かうにせよ、時間は心理学的視点からして、程度もニュアンスも受け入れない二つの抽象の混合としてあらわれる。どちらの体系においても、持続は一つしかなく、その持続が底もなく岸もない河のように、どこか知らない方向へ流れていく。それでもこれが河であり流れであるのは、これらの学説の論理的欠落を、実在が利用して代償を得ているからだ。

しかし、持続の具体的な流れのなかに、直観の努力によって最初から身を置けば、事情はまったく変わってくる。もちろん、多種多様な持続を定立する論理的な理由などはもうどこにも見いだせない。ベルクソンはここで有名なオレンジ色の比喩を提示している。私たちの持続以外に持続はないとしてもいい。たとえば、世の中にオレンジ色しかないという場合のように。しかし、色の根底にある意識が、外部からオレンジ色を知覚するのではなく、内部からそれに共感すれば、赤と黄のあいだに自分がいることを感じるだけでなく、さらに黄の下に、赤から黄にいたる連続的な色調が自然に伸びるスペクトルの全体をおそらく予感するだろう。私たちが自分の持続を直観すれば、純粋な分析が私たちを虚空に宙吊りするのとは違い、連続的な持続の全体と私たちを接触させてくれるだろう。²⁰

私たちはそれを上方にも下方にもたどっていく。下方の場合、ますます散乱する持続に向かって歩むのだが、私たちの持続の脈動よりも速いその脈動は、私たちの単純感覚を分割して、その質を薄めて量化するだろう。極限にあるのは、純粋な等質であり純粋な反復であるが、私たちはそれによって物質性を定義するだろう。

²⁰ ここで再び若きドゥルーズの言葉に耳を傾けてみよう。「今や潜在的なものこそ絶対に確実な存在様態を定義する。持続とは、潜在的なものである。持続のしかじかの程度は、その程度が分化するかぎりにおいて、現実的である。たとえば持続はそれ自体としては心理的なものではないが、心理的なものは持続の或る程度をあらわし、その程度は他の程度の間で他の程度に伍して実現される。たしかに潜在的なものはそれ自体としては作用しないものの様態である。なぜならそれはみずから分化することによって、自己の本源の姿を幾分かはとどめながらも自己そのものであることを止めることによってだけ、作用することになるだろうからである。しかしまさにその点によって、潜在的なものは現にあるところのもの様態である。」(『差異について』82-84頁)

逆の方向に歩むと、私たちはますます緊張し、収縮し、強度を高める持続に向かっていくことになる。極限にあるのは永遠であろう。しかしそれは概念的な永遠、つまり死の永遠ではなく、生の永遠 (éternité de vie) である。

そこにおいて、私たちの持続は光のなかの振動のようなものとなる。物質性が持続の散乱であるとしたら、これはあらゆる持続の凝縮したものであるというべきだ。これら二つの極限のあいだを直観は動く、その動きがまさに形而上学である。

□実在と動き (Réelle et Mouvant)

ここで、これまでみてきた動きの諸行程をたどることはできないが、方法について概略を示し、その最初の適用を試みたからには、この方法の基にある諸原理をできるだけ正確な言葉で述べておきたい。なお、ここに示す命題の大半は、この論文のなかで証明の端緒を与えられている。

- 一 外的なものではあるが私たちの精神に直接与えられた実在がある。哲学者たちの観念論や実在論に反して、常識はこの点において正しい。
- 二 この実在は動きである²¹。出来上がった物はなく出来つつあるものだけがあり、維持される状態はなく変化する状態だけがある。停止はあくまでも外見上のもの、あるいはむしろ相対的なものである。たえまなく流れる自分自身の自我に対して私たちのもつ意識は、私たちを実在の内部に導き入れる。私たちはその実在にならって、他の実在を表象するべきである。したがって、発生状態における方向の変化を傾向と呼ぶならば、あらゆる実在は傾向である。
- 三 私たちの精神は固定した支点を求めようとするものであり、生活の通常の推移において、状態および事物を表象することを主要な機能としている。私たちの精神は実在の分割されない動きに対して、いわばスナップショットを断続的にとっている。そうして得られたものが感覚と観念であり、これによって私たちの精神は連続を不連続で、動きを安定で、変化しつつある傾きを、変化と傾きの方向を示す固定点によって置き換える。私たちの知性はその自然な坂道に従うとき、一方では固定した知覚により、他方では安定した概念により事を処す。
- 四 形而上学に取りついている難問、それがひき起こすアンチノミー²²、それが陥るさまざまな矛盾、敵対する学派への分裂と解消できない体系間の対立、そうしたものの大部分は、私たちのふだん実用上の目的のために使っているやり方を、実在の非実利的な認識のために適用するところから生じている。動く実在から思考によって固定した概念をひき出すことはできるが、固定した概念で実在の動きを再構成することはできない。

²¹ 『思想と動くもの』出版時に付された原注でベルクソンは以下のように記している。「もう一度言うが、これによって私は実体を退けるのではない。反対に、私はさまざまな実在の存続を主張する。しかも私はその表象を容易にしたと思っている。どうしてこうした説をヘラクレイトスの説になぞらえることができたのだろうか。」なお、原章二は、ここから、ベルクソンの1903年のテキストに対する批判に抗議する気持ちが窺えるとしている。(原章二訳：訳注18)

²² カントによれば、純粹理性が感性的経験の限界をこえて認識を拡張し、世界全体についての主張を定立しようとするとき、いわゆる二律背反に陥る。われわれの悟性は、ある特殊な出来事が時間上一つの起源をもちうることを理解するが、世界全体を考える純粹理性は、世界が一つの起源をもつことを肯定すると同時に否定しなければならぬという撞着に陥る。このような二律背反が起こるのは、世界全体、すなわち現象の全体について何事かを主張しようとする場合、われわれはすでに可能な経験の限界をこえているためである。なお同じような二律背反は、世界に空間上の制限があるかどうかについて、世界の実体の性状が単純であるか複合的かという問いについて、また世界全体へ拡張された因果性、絶対性に必然的な存在者(神)の存在についても起こってくる。カント哲学とともに有名な二律背反の論理は、のちにヘーゲルにいたって完成を見た弁証法の論理が発展してくる母胎となった。(「世界の名著」坂田徳男訳：訳注97頁)

□いわゆる認識の相対性 (Relativité de soi-disant reconnaissance)

五 私たちの認識の相対性についての論証は、一つの根本的な誤謬によって汚されている。そうした論証は自分が攻撃している独断論と同じく、すべての認識は輪郭の画定した概念から必然的に出発し、その概念を用いて流れる実在を捕捉するべきであると仮定している。

六 私たちの精神²³は動く実在のなかに入り、不断に変化するその方向を自分のものとし、直観によって²⁴実在を把握することができる。そのためには精神は自らに激しい力をふるい、自らの常習的な考え方を逆転し、範疇を絶えず裏返しするか、あるいはむしろそれを改鑄する必要がある。哲学するとは、思考の習慣的な方向を逆転することである。

七 そのような逆転が方法的に行われたことは、かつて一度もない。人間の精神が手にした最も強力な探究方法である微積分法は、まさにそうした逆転から生まれたものである。²⁵まさしく近代数学は出来上がったものから出来つつあるものを置き換え、さまざまな量の発生をたどり、運動を外から、つまり展開されたその結果から捉えるのではなく、内から、つまり変化しつつあるその傾きにおいてとらえようとする努力であり、事物の輪郭の動的な連続性を自分のものにしようとする努力である。たしかに、近代数学には事物の輪郭で満足しているところがある。それが量の科学にほかならないからである。ただし、数学的な手法が量にしか関わらないにしても、量がつねに発生状態の質であることを忘れてはならない。量は質の極限のケースであるといってもいい。したがって、形而上学が数学を生み出した観念を取り上げて、これをすべての質へ、つまり実在一般へ広げるのは自然である。形而上学は自らの道を進むにしがたがって、ますます記号に翻訳できない対象に出会うだろう。しかし形而上学は少なくともまず、実在の連続性と動きに接触し、しかもその接触から驚くほど大きな利益を得るだろう。形而上学の目的の一つは質的な微積分をおこなうことであると言うことにしよう。²⁶

八 ひとたび得られた直観も、私たちの思考習慣にかなう表現と適用の様式、すなわち私たちが大いに必要とする堅固な支点を明快な概念で供給する表現と適用の様式を見出さなければならない。それが厳密とか正確とか呼ばれるものの条件である。しかし、そうした方法の拡張と論理的な仕上げが長期間継続するのに対して、方法を生み出す行為は一瞬のことでしかない。そのため私たちは、科学の論理的な装置を科学そのものと取りちがえ、そのほかのものをも生み出すことができた直観を忘れてしまうのである。²⁷

²³ 1903年版のテキストでは「私たちの精神 (notre esprit)」の代わりに「私たちの知性 (notre intelligence)」とある。(原章二訳：訳注 19、20)

²⁴ 1903年版のテキストでは、「直観によって (intuitivement)」の代わりに「直観と呼ばれる知的共感によって」とあり、その後に「それはたいへん困難なことである」という一文が入っている。(原章二訳：訳注 21)

²⁵ ベルクソンは、ここでは特にニュートンにおける流率法の考察を挙げている。(原注 5)

²⁶ 校訂版の注は、この「質的な微積分」の内容を、「実在する持続」の項の末尾の叙述(持続の具体的な流れのなかに身を置く努力)と関連づけている。(原章二訳：訳注 22)

²⁷ ここで、ベルクソンは以下に示す注釈を付している。「この論集(『思想と動くもの』)の第二論文のはじめで説明するように、私は「直観」という言葉を使うことを長いあいだためらった。いよいよそれを使おうと決めたとき、私はこの言葉によって思考の形而上学的な機能を示したのである。すなわち、それは主として精神による精神の内面的な認識のことであり、副次的には精神による物質の本質的な面の認識のことである。いうまでもなく知性は何よりも物質をあやつり、したがってそれを認識するためにできているのであり、物質の根底に触れることを特別な使命とはしていない。(1902年書かれた)この論文において、とくにその最後の数ページにおいて、私が直観という言葉に与えた意味はこれである。もっと後になって、正確を期さなければならないという気持ちがさらに強くなり、私は知性と直観とを、科学と形而上学とを、いっそう明確に区別せざるを得なくなった。しかし、一般的に言えば、言葉をその特定な意味でそのつど定義すれば、あるいは単に前後関係でその意味がじゅうぶんわかるならば、用語法の変更はたいした不都合を起ささないものである。(原注 7)

この直観の忘却から、科学的認識の「相対性」に関して、哲学者だけでなく科学者自身が述べているあらゆることがらが発生する。しかし、相対的であるのはあらかじめ存在する概念を使って固定したものから動くものへ向かう記号的な認識であり、動くものうちに身を置いて事物の生命そのものを自分のものにする直観的な認識ではない。この直観は絶対的なものに到達する。²⁸それゆえに科学と形而上学は直観のうちで出会うのである。

九 事物を根本的に認識するのに二つの異なったやり方は存在せず、さまざまな知は形而上学のうちその根をもつというのが古代の哲学者たち一般の考え方だった。彼らの誤りは、変化は不変のものを表現し展開するだけであるという人間精神にきわめて自然な信仰を抱いたことだった。結果として、行動は弱められた観照となり、持続は不動な永遠の動く偽りの像となり、魂はアイデアの墮落であるとされた。プラトンに始まりプロティノスに終わるこの哲学の全体は、「動くものより動かないものに多くものがあり、安定したものが単に減少するだけで不安定になる」という原理を添加したものであると言える。しかし、真実はその反対だった。

□近世²⁹の形而上学と科学 (Métaphysique et science aux modernes)

近世の科学は動きが独立の実体として確立された日、ガリレイが斜面上に球を転がし、高所から低所へ向かうこの運動の原理を、高さで低さという概念、つまりアリストテレスが動きをそれによってじゅうぶん説明できると信じた二つの不動を求めずに、この運動そのものをそれ自体のうちに研究しようと固く決心した日に始まる。

持続の直観も悟性の光にあたればたちまちにして固くなり、判明で不動な概念となる。悟性は事物の生きた動きのうちに、現実的あるいは潜在的な停止点を定め、出発点と到着点を記録する。人間の思考が自然に働いている場合には、それだけが重要なのである。しかし、哲学は人間の条件をこえるための努力でなければならない。³⁰

直観の道筋の上に目印として付けた概念を、科学者たちは何よりも好んだ。記号の状態となったそうした滓に目が行けば行くほど、科学はますます記号的な性格を強めることになった。³¹

科学者は科学の記号的な性質を信じるほどに、科学を記号的なものとし、その性格を強調した。その結果、実証科学における自然的なものとならぬ人為的なものの区別がつかなくなり、あらゆる認識の相対性を主張する学説への道を準備した。

しかし、形而上学もそれと同じようなことをしたのである。

²⁸ 1903年版では「絶対的なもの (un absolu)」の代わりに「絶対 (l'absolu)」となっている。(原章二訳：訳注 23)

²⁹ 坂田訳では「近代」、河野訳と原訳では「近世」となっているが、ベルクソンはガリレオにその端緒を置いているので、ここでは「近世」という訳を採用した。

³⁰ 原章二は、「ベルクソンはニーチェのことを著作のなかで一度だけ(『道徳と宗教の二源泉』原書 298 頁、世界の名著 500 頁)、しかもやや否定的にしか語っていないにもかかわらず、ドゥルーズが書いているように(『ベルクソンの哲学』)ここにニーチェ的な超人のニュアンスを見ることはきわめて自然であろう(訳注 24)」と書いている。なお、原章二が指摘するドゥルーズの記述は以下のようになっている。「ベルクソンは哲学に全く人間的な知恵と均衡を与える哲学者ではない。人間的なものと超人間的なものを(われわれの持続よりも劣っている持続かすぐれている持続)にわれわれを開くこと、人間的条件を超越すること、これが哲学の意味である。」(宇波彰訳、20 頁)

³¹ ベルクソンは前の原注 7 を補足して、次のように書いている。「これらの文章を書いて以降、私は「科学」という言葉の意味をもっと狭め、純粋知性による慣性的な物質の認識をとくに科学的認識と名づけるようになった。そのことは生命と精神についての認識をかなりの程度——それが慣性的な物質の認識と同じ探究方法に訴える程度に応じて、科学的と呼ぶことを妨げないだろう。逆に慣性的な物質の認識を、それが歴史の決定的な瞬間において純粋持続の直観を利用するかぎりにおいて、哲学的と言うこともできるだろう。この点は原注 1 も参照のこと。」(原注 8) なお、この原注も 1934 年のものである。

形而上学者であるとともに科学の改革者でもあった近世哲学の巨匠たちは、彼らが信じたものや自分が言ったことよりもずっと多く、直観のなかに身を置いた。彼らはそうした直観のまわりに諸々の体系を組織した。ある容易な知的理解への確信を「アイデア」と呼び、ある生命の不安を「魂」と呼ぶとすれば、近世の哲学においては、目に見えない一つの流れが「魂」を「アイデア」の上に高めているように思われる。

ところが、この形而上学は、この科学と同じように、自分の深い生命のまわりに記号の織物を豊かに織ったのである。形而上学の主たる存在理由は記号との断絶であることを、この形而上学は忘れてしまったのだ。

カントの批判哲学の主要な技巧の一つは、形而上学者と科学者の言い分をそのままに受け入れて、形而上学と科学を記号主義の極限まで推し進めたことである。形而上学と科学が「知的直観」とのあいだに持っているつながりをひとたび無視すれば、私たちの科学がまったく相対的なものであり、形而上学がまったく人為的なものであることを示すことは、カントにとって容易なことだった。³²科学においても形而上学においても、カントは悟性の独立を極端に追い求め、その両者から「知的直観」という内的な重しを取り除いたのである。そうなればもう、関係をあつかう科学は被膜になった形式だけを、事物をあつかう形而上学は薄味になった内容だけをカントに対して示すことになるだろう。

カントが形而上学に手荒な打撃を与えたために、両者はいまなお昏迷状態から完全には覚めていない。私たちの精神は科学をまったく相対的な認識となし、形而上学を空虚な思弁とする見解に進んで従おうとしている。カントの批判が当たっているのはとりわけ古代哲学に対してであり、近代人が今なお多くの場合に思想的に囚われている古代的な形式に対してである。

『純粋理性批判』を注意深く読むならば、カントにとって科学は普遍数学であり、形而上学はほとんど手直しのないプラトン主義であることがわかるだろう。本当をいえば、普遍数学の夢自体がすでにプラトン主義の遺物にすぎない。普遍数学とは、アイデアがもはや事物において成り立つのではなく、関係もしくは法則において成り立つのだと想定されたときに、アイデアの世界が転化するところのものである。何人かの近世哲学者が抱いたこの夢を、カントはすでに実現されたものだと考えた。³³カントの批判の主要な課題は、この数学を基礎づけること、すなわち普遍数学によって知性と対象を結びつけるために知性はどうかあるべきであり、対象はどうかあるべきであるかを規定することだった。

その結果、相対的であるからこそそのすべてが有効である科学が可能になり、形而上学は不可能となった。要するに、『純粋理性批判』の全体は、アイデアを事物であるとするれば不当なプラトン主義が、アイデアを関係であるとするれば正当なものになることを、そしてまた、こうしてひとたび地上へ引き下された出来合いのアイデアが、まさしくプラトンの望んだとおり思考と自然の共通の根源になることを確立する結果となっている。しかしまた『純粋理性批判』の全体は、私たちの思考³⁴がプラトン流に考えることしかできないという要請に基づいてもいる。プラトン流に考えるとは、あらゆる可能な経験を既成の鑄型に流し込むことである。

ここにすべての問題が見出される。科学的認識がカントの望んだようなものだとすると、アリストテレスが信じたように、自然のなかにあらかじめ存在するだけでなく、あらかじめ定式化されている一つの単

³² カント『純粋理性批判』第二版序文および『プロレゴメナ』序文を参照。(原章二訳：訳注 27)

³³ この点についてバルクソンは、ヴント (Wunt) の『哲学研究 (Philosophische Studien)』(第九巻、1894年)におけるラドゥレスク・モトル (Radulescu-Motru) の「自然の因果性に関するカントの理論の展開について (Zur Entwicklung von Kant's Theorie der Natu-causalität)」を参照せよと指示している。(原注 9)

³⁴ 1903年版では「私たちの思考」の代わりに「私たちの知性」となっている。(原章二訳：訳注 28)

純な科学があることになる。また、形而上学的な認識がカントの望んだようなものだとすると、それはすべての大問題を前にして精神が二つの相反する態度を取ることができるということに帰着する。³⁵

近世の科学は単一でもなければ単純でもない。もちろん最後には明晰になる観念に基づいている。しかし、観念が深いものである場合、それは用いられることによってしだいに明晰になったのである。深く豊かな観念は、その一つ一つが実在のさまざまな流れとの接触点であるのだが、そうした流れは必ずしも同じ一点に集まるものではない。本当は、そうした観念が宿っている概念は、相互摩擦によって角を丸くしながら、いつでも互いのあいだで何とか折り合いをつけようとしているのである。

他方、近世の形而上学は、和解のできない対立に終わるほど根源的な解決から成り立っているのではない。哲学するということは、「批判」が定立と反定立という対立を外から見て取るこの具体的な実在の内部に、まさに直観の努力によって身を置くことである。根底に直観をもっている学説は、その直観の程度に正確に比例してカントの批判を免れる。そして、命題のなかで凝固して死んだ形而上学ではなく、哲学者のなかで生きている形而上学を考えるかぎり、そのような直観を根底にもつ学説こそが形而上学のすべてである。

結論として次のように言おう。直観の能力には何ら神秘的なところがない。文章をうまく書くことができた人なら誰でも知っているが、主題について思いを凝らし、資料を博捜し、メモをすべて取ったにしても、実際に書き始めるためには何かさがさらに必要となる。それはしばしば辛い努力であり、問題の核心に一気に飛びこんで、あとはもう身を任せていける奥深い衝動をできるだけ深いところに見つけようとするのである。その衝動がひとたび得られれば、精神はそれに駆り立てられて道を進む。

形而上学的な直観はこれと同じものと思われる。文章を書く場合のメモや資料に相当するものは、実証科学によって、そしてとりわけ精神の自己反省によって集められた観察と経験の総体である。なぜなら、実在の表面的なあらわれと長いあいだ付き合っただけで信頼を勝ち得るのではなく、実在の直観、つまり実在のもっとも内的なものとの精神的な共感³⁶を得ることはとうていできない。単に目立つものだけを取り入れるのではなく、莫大な量の事実を集め、それをすべて溶かさなければならないのだ。

この半世紀以来、形而上学が部分的に光を失った理由は、今日の哲学者が、かつてよりもはるかに分化した科学と接触する際に感じる極度の困難に由来している。ただし形而上学的な直観は、たしかに物質的な認識の力なくしては到達できないものであるにせよ、そうした認識の要約や総合とはまったく違うものである。それは運動への衝動が運動体の通過した道とは違い、ゼンマイの弾力が振り子の目に見える運

³⁵ マドレーヌ・バーテルミー＝マドール (Madleine Barthermy-Madule) は「ベルクソンから観たカントの認識論と形而上学 (La connaissance et la metaphysique kantienne vues Bergson in BERGSON ADVERSAIRE DE KANT, 1966)」でベルクソンのカント批判を次のようにまとめている。「カント的認識論に対するベルクソンの批判は、カントが観ようとしなかったものをカントが観たものから区別し、カントのパースペクティブを遡って、誤謬と思われるものが入り込んだ地点を暴露する。空間や空間化された時間や認識における、質料と形式の区別、また悟性の秩序化する働きの見出し、これらのものがカント哲学の教えである。そして概念化の過程によって獲得された偶然的実践的な見取り図、純粋な拮抗と純粋な持続の実在性、つまり時間－空間を超えた世界における絶対的実在、これらのものがカントの観なかつたものである。なぜ彼はこれらを観なかつたのであろうか。なぜなら彼は徹底的に進もうとはしなかつたからである。ヒュームに抗して科学を正統化することに専念した彼は、科学の位置をその総体において検討することはなかつた。科学を基礎づけるこの排他的な関心は、カントを規範的なものの内に制限し、事実のあらゆる発生から遠ざけた。物自体の理解に対する概念の無力さ、論理学に対する存在者の自律性、これらによって、カントは形而上学は直観的なものであるか、それともそれは存在しないかであると考えようになり、結局は形而上学は存在しないと結論するに至ったのである。」(市原豊・江川隆男訳、『現代思想 9月臨時増刊 ベルクソン』1994 Vol.22-11、246頁)

³⁶ 1903年版では「精神的な共感」ではなく「知的共感」となっている。(原章二訳：訳注30)

動とは違うのと同じである。この意味において形而上学は、経験の一般化とは少しも共通点がないにもかかわらず、全体的な経験として定義することができるだろう。

【ベルクソンにおける科学と形而上学】

ベルクソンは、19世紀後半から20世紀初頭の同時代の科学に、可能な限りコミットメントした哲学者であることは間違いないが、そこで彼が持ち出してきたのが、いわば「直観の形而上学」である。

篠原資明はそのようなベルクソンの立ち位置を次のように示している。

++ 形而上学といえば、今日では、まことに評判が悪い。形而上学の超克こそが、現代思想の課題であるかのように喧伝されているためか、形而上学に触れるだけで、時代遅れと決めつけられそうなほどだ。そんな中、二〇世紀にぬけぬけと形而上学を語った哲学者がいる。ベルクソンとホワイトヘッドである。いや、形而上学だけではない。彼らは、創造性を強調し、神と宗教を語ったのである。思えば創造とは神の特権だった。しかし、創造性についての別の思考を提示することで、彼らは神についての新しい考え方へと道を開いたのである。このように、創造性を考えなおすにあたって、二人が参考にしたのは、科学革命だった。ベルクソンの場合は、進化論に代表される生物学革命、ホワイトヘッドの場合は、相対性理論に代表される物理学革命である。（篠原資明『ベルクソン——〈あいだ〉の哲学の視点から』岩波新書、2006年、52頁）

そして、篠原がそのようなベルクソンが持ち出してきた形而上学に見出すのは、科学との「相補性」である。

++ ベルクソンは近代科学が長さとしての時間を扱うとすれば、新しい形而上学は創造としての時間を扱うべきだとした。そしてここでいわれる形而上学は、あくまで科学と相補的な関係を持ちつつけるものとして構想されている。

形而上学という言葉に現代人が反発するとすれば、そこに古代的な思考の残滓を見るからだろう。ところが古代の形而上学は、古代の科学と同類のものだった。古代人にとって「科学とは、バラバラで断片的な形而上学であり、形而上学とは、集中された体系的な科学だった」（『創造的進化』4章）のである。

或る意味で、そのような形而上学は、近代科学の登場とともに死んだのである。にもかかわらず、ベルクソンによれば、近代の哲学は近代科学に対して、古代の形而上学と同じようにふるまおうとしたという。すなわち、そのつどの近代科学の仕事を完結したのに見立てて、それを体系化しようとしたのである。近代科学に対してメタ言語として接しようとしたといってもよいだろう。それもあって、科学が取りにがす創造としての時間については、曖昧な態度しかとれなかったのである。

しかし、科学的認識が完結することもなければ、ベルクソンのいう意味での形而上学が完結することもない。この形而上学は、あくまでも科学と相補的な関係を取り結びながら、真実らしさを、蓋然的な真理を少しずつ獲得していくほかない。のちにホワイトヘッドによって共有されるだろう、このような考え方を、ベルクソンは近代科学によって示唆されていたものと見なす。ともあれ時間は、こうして相補性の特権的な場ともなる。（同前、55-57頁）

では、科学の側からベルクソンに対する応答はなされたのだろうか。ここでは、篠原も紹介しているプリゴジン／スタンジェールの見解を紹介しておこう。

++ ベルグソンにとっては、科学的合理性の限界はすべて、一つの決定的な限界に還元できる。すなわち、科学的合理性は時間を決定論的法則によって結合された一連の瞬間状態に還元させるので、持続を理解することができない、というのである。

「時間は発明であるか、さもなければ全く何物でもない。」(『創造的進化』原書全集、p.784) 自然は変化であり、新しいものを絶え間なく作ろうとする苦心の作である。また、あらかじめ確立された手本などは頼らずに、本質的に未確定の発展過程によって創造される全体である。「生命は時間の中で進行し、存続する。」(Ibid.p.538) 知性によって捉えることができるのは、この進行のうち、操作可能で計算可能な要素として、知性が固定化させることに成功した部分だけであり、また、知性が、単に瞬間を縦列させただけとみなせるような時間に結びつけることに成功した部分だけである。

(中略：『創造的進化』原書全集、p.784 の先ほどの引用に続く部分の長い引用)

持続そのものを理解しようという段になると、科学は無力である。必要とされるのは直観である。「心による心の直視」(『思想と動くもの』原書全集、p.1273) である。「純粋な変化、すなわち真の持続は精神的な何物かである。直観こそ、精神、持続、純粋変化に到達する手立てである。」(Ibid.p.1274)

カント以後の自然哲学が失敗したのと同じようにベルグソンも失敗した、と言えるだろうか。彼が創り出そうと願った直観にもとづく形而上学が実現しなかったという点では失敗した。ヘーゲルとは違い、ほぼ確立された科学に対して判断を下せばよいという好運に恵まれた点では、彼は失敗していない——古典科学はその極致にあり、今日もおわれわれがまさに問題にしているような問題を彼は見きわめていた。カント以後の批判哲学者と同様に、彼もその時代の科学を科学一般と同一視していた。それゆえ、彼は科学に原理的 (de jure) な限界があると考えたが、これは実は実際上 (de facto) の限界に過ぎなかった。その結果彼は、科学の各分野や他の知的活動に対して、結論的な現状 (statuquo) を定義しようとした。したがって、彼に残された唯一の展望は、相克するアプローチを、共存させることが関の山であるような方法を持ち込むことであった。

結論として言えることは、ベルグソンが古典科学の業績をまとめた方法は現在もある程度受け容れられるとしても、もはやそれは科学的事業に対する永遠の限界を示すものとしては、受け容れられない。われわれはむしろそれを、科学が現在経験しつつある変態 (メタモルフォーゼ) が実行し始めているプログラムとみなす。特に、運動に結びついた時間が、物理学における時間の意味のすべてを尽くしているのではないことをわれわれは知っている。このように、ベルグソンが批判した限界は、乗り越えられ始めている。それは、科学的アプローチや抽象的思考を放棄することによってではなく、古典力学の概念の限界を認識し、より一般的な状況で成り立つ新しい定式を発見することによってである。(I.プリゴジン/I.スタンジェール『混沌からの秩序』伏見康治・伏見譲・松枝秀明訳、みすず書房、1987年、144-146頁、ORDER OUT OF CHAOS by Ilya Prigogine and Isabelle Stengers, Bantam Books, New York, 1984)

了